

十一 千早城

楠木正成がたてこもつた千早城は、けはしい金剛山にあるが、まことに小さな城で、軍勢もわづか千人ばかり。これを圍んだ賊は、百萬といふ大軍で、城の附近にいたい、すつかり人や馬でうづまつた。

こんな山城一つ、何ほどのことがあるものかと、賊が城の門まで攻めのぼると、城のやぐらから大きな石を投げ落して、賊のさわぐところを、さんさんに射た。賊は、坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。これにこりて、賊は、城の水をたやして、苦しめようとはかつた。

まづ、谷川のほとりに、三千人の番兵を置いて、城兵が汲みに來られないやうにした。城中には、十分水の用意がしてあつた。二日たつても、三日たつても、汲みに

昭和二十一年三月二日 翻刻印刷
昭和二十一年三月二十日 翻刻發行
（昭和二十一年三月二日發行）

初等科國語三 第五十四冊
定價 金五拾錢

著作權所有 發行所 文部省

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
翻刻發行 東京書籍株式會社

Approved by Ministry
of Education
(Date Mar. 2, 1946.)

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
印刷所 東京書籍株式會社

發行所 東京書籍株式會社

來ない。番兵がゆだんをしてゐると、城兵が切りこんで來て、旗をうばつて引きあげた。

正成は、この旗を城門に立てて、さんさんに賊のわる口をいはせた。賊が、これを聞いて、くやしがつて攻め寄せると、正成は、高いがけの上から太木を落させた。さうして、これをよけようとして、賊のさわぐところを射させて、五千人餘りも殺した。

この上は、ひやうらう攻めにしようとして、賊は、攻め寄せないことにした。

ある朝まだ暗いうちに、城中から討つて出て、どつとときの聲をあげた。賊は、「それ、敵が出た。一人ものがすな。」と押し寄せた。城兵はさつと引きあげたが、二三十人だけはふみとどまつた。賊が、四方からこれをめがけて押し寄せると、城から大きな石を四五十、一度に落したので、また何百人か殺された。ふみとどまつてゐた

のは、みんなわら人形であつた。

もうこの上は、何でもかでも攻め落してしまへといふので、賊は、大きなはしごを作り、これを城の前の谷に渡して橋にした。幅が一丈五尺、長さが二十丈、その上を賊はわれ先にと渡つた。今度こそは、千早城も危く見えた。すると、正成は、いつのまに用意しておいたものか、たぐさんのたいまつを出して、これに火をつけて、橋の上に投げさせた。さうして、その上へ油を注がせた。橋は、まん中からもえ切れて、谷底へどうと落ちた。賊は何千人か死傷した。

賊が、千早城一つをもてあましてゐると、方々で、官軍が、ひやうらうの道をふさいだので、賊はすっかり弱つた。百人逃げ二百人逃げして、初め百萬といつた賊も、しまひには十萬ばかりになつた。それが前後から官軍に討たれて、ちりぢりに逃げてしまつた。

るのに出あつた。

義光は大聲に、

「見れば尊い御旗、どうしてそれを手に入れたのか。」とつめ寄つた。

莊司は、わうへいに答へた。

「大塔宮を御道筋に待ち受け申し、この御旗を、この莊司が手に入れたのだ。」

義光は、かつと怒つた。

「それはけしからぬ。おそれ多くも宮の御道筋をふさいだ上に、錦の御旗をけがしたてまつるとは。」

と叫んで、御旗をうばひ取るが早いか、かの大男をひつつかんで、まりのやうに投げつけた。

錦の御旗を肩にかけ、相手をにらみつけながら、おちつきはらつて、その場をたち去つた義光は、やがて宮に追ひつきたてまつつた。

大塔宮は、義光の忠義を心からお喜びになつた。

大塔宮は、北條高時征伐のため、兵をお集めにならうとして、大和の十津川から高野の方へお向かひになつた。お供の者は、わづかに九人であつた。

途中には、敵方の者が多かつた。中にも、芋瀬の莊司は、宮のお通りになることを知つて、道に手下の者を配つてゐた。

宮は、どうしても、そこをお通りにならなければならなかつた。

お供の中に、村上彦四郎義光といふ人がゐた。このへんの敵のやうすを探るために、思はず時を過して、宮のおあとから急ぎ足に道をたどつて來たが、ふと見ると、向かふに、日月を金銀で現した錦の御旗を、おし立ててゐる者がある。義光は、ふしんの眉をひそめた。あれこそは、大塔宮の御旗である。もしや、宮の御身に、何事か起つたのではなからうか。義光は、胸をとどろかし

母馬子馬、

沼の岸、

夏のゆふべの柳かげ。

母が番して、

子の馬は、

ゆつくりゆつくり水を飲む。

まるくひろがる

水の輪が、

いくつも出では消えるたび、

水にうつつた

三日月が、

ゆらゆら見えたりかくれたり。

母馬子馬、

沼の岸、

柳のかげが暮れて行く。

十四 くものす

二階の窓から見ると、大きなくもが一匹、すうつと、私の目の前へぶらさがつて来ました。私は、びつくりしました。

見ると、くもは、雨どひのところから、糸を引いておりて来たのです。さうして、そのまゝ、じつとして動かうともしません。これから、いつたい、何をしようとするのかと思ふと、私は、急におもしろくなつて来ました。

くもは、やがて後の方の足を動かして、おしりのところから、たくさんの細い糸を引き出し始めました。糸は一センチ、二センチと、見るまに延びて、二メートルぐ

つばな網ができてゐました。

十五 夕 日

赤い大きな夕日が、今、西の遠い、遠い地平線に落ちて行くところです。

焼けきつた鐵のやうにまつかです。たらひほどに見える大きな圓の中には、何かとろとろと、とけた物が動いてゐるやうに見えます。

地上のみどりのあざやかなこと、美しいこと。遠くの木立や、家や、煙突が、くつきりと夕空に浮き出してゐます。

日は、ぐんぐんと落ちて行きます。一センチ、二センチと刻んで行くやうに、動くのがはつきりと見えます。もう、圓の下の端は、地平線にかかりました。

すんすん、沈んで行きます。

圓は、しだいに半圓となりました。櫛ほどになりました。

夕風にゆられながら、ふはふはと空中にただよつてゐるのは、ほんたうにきれいでした。

そのうちに、このたくさんの糸の中の一本が、向かふの柿の木の枝にくつきました。くもには、それがすぐわかるものとみえて、しきりにこの糸を、引つぱつたり動かしたりしてゐましたが、やがてそれを傳つて、向かふへ渡り始めました。さうして、風にゆられながら、やつと柿の木にたどり着きました。くもは、はつと一安心したやうでした。

今度は、前の方の足をしきりに動かして、この糸を自分の方へたぐり始めました。すると、今までたるんでゐた糸が、だんだんまっ直になりました。かうして、雨どひと柿の木との間に、一筋の糸が、空中にびんと張り渡されました。

くもは、この上を、いそがしそうに行つたり来たりして、すゝ作る仕事をつづけてゐました。私は、くものりこん

日が落ちたあとの空は、なんといふ美しうてせう。今日が沈んだばかりのところから、さし出たいく百筋のこまかい金の矢が、夕空を染めて、空は赤から金に、金からうす青に、ぼかしあげたやうです。

あちらこちらに、真綿を引き延したやうな雲が、金色に、くれなゐに、色づき始めます。

美しい空です。はなやかな空です。

十六 燕はどこへ行く

夏の末ごろ、燕が、電線や物干竿に、五六羽ぐらゐ並んで止つてゐるのを、よく見かけます。時には、十羽二十羽も、すらりと並んでゐることがあります。その中には、親燕もゐますが、今年生まれた子燕が、たくさんまじつてゐます。もう大ききだけは、親燕と同じですが、まだ口ばしの下の赤色が、親燕ほどくありません。口ばしの兩わきが、いくぶん、黄色に見えるのさへあります。

日本からオーストラリアまでは、一萬キロ以上もあり
ますが、燕は、決して自分の國を忘れません。日本に春
が來ると思へば、もう矢もたてもたまらず、北をさして
進むのです。その小さな胸には、若葉のもえる日本の春
の美しさを、思ひ浮かべてゐるでせう。青々と植ゑつけ

あの黄色な皮をむくと、中から白い、柔かな實の出てるバナナは、きつとみなさんのすきな果物にちがひありません。ところで、あのバナナが、どこでできるか、どういふ植物に生るか、みなさんはそれを知つてゐますか。

私たちのたべる、あの美しいバナナは、臺灣のゆたかな日光を受けて、育つた果物です。私たちが「ばせう」といつてゐるものに、よく似た植物に生る果物です。

かういふと、みなさんは、臺灣にさへ行けば、バナナの本がどこにでもあつて、黄色なのを、そのまゝ取つてたべるのだなと思ふかも知れませんが、それは大きなまちがひです。

いくら臺灣でも、あの美しいバナナが、野生でできるのではありません。ちやうど、みなさんのたべる、おいしい梨や水蜜桃などが、畠でだいに育てられた木に生るのと同じことです。梨畠や桃畠はいつて、枝のまゝもぎ取つてたべたら、みなさんはきつとしかられるでせう。臺灣のバナナにしても、それと同じことなのです。

臺灣では、よく山ぞひの土地に、バナナが植ゑてあります。ちよつと遠くから見ると、バナナの畠は、キャベツか、それとも、カンナでも作つた畠のやうな感じがしますが、花が咲いてから三四箇月たつうちに、このふさがだんだん大きくなつて、それにぎつしりと、みなさんのたべる、あのバナナが生るのです。

バナナは、まだ青いうちに取つてかごにつめ、船に積んで遠方へ送ります。青いバナナは、むろへ入れて置くと、四五日のうちに、皮が黄色になり、おいしい味が出て來ます。

太陽のゆたかな熱と光とを吸つて、すくすくと育つた臺灣のバナナは、かうしてみなさんのお目にかかります。

十八 林の中

葉は落ちて
明かるきこさる。

林の中の 小道を行けば、一
一足ごとに、

ちんち行儀よく、しかも、たくさん植ゑてあるのです。ところによると、何百メートルといふ高い山の斜面が、ほとんど全部、バナナ畠であることがあります。

これほどたくさん植ゑてあるバナナが、一本一本だいにじにされてゐます。まはりの草を取つたり、肥料をやつたり、そのほか、いろいろせわをしてやるのです。實が生ると、梨や桃と同じやうに、袋まで掛けてやるのです。

バナナは、苗を植ゑてから早くて十箇月、おそくても一年二箇月たつと、數メートルの高さに成長して、花が咲きます。古い株を切つて出た芽は、それよりも早く成長して花が咲きます。

まづ、葉と葉の間から、太い、長い一本の軸こしらへが出ます。それが花の軸で、その先に、赤むらさき色の、大きな蓮はすのつばみのやうなものがつきます。やがてそれが開くと、中に黄色の花が、矢張りやうに並んで咲きます。か

たたずみて、

しばし聞きたい

林の奥の秋の静けさ。

鳴くはいづこ、

ちやうちと、鳥の聲。

見あぐれば

高きこさる、

小枝小枝は かすかにふるふ、

晴れたる空に、

細きこと 針のごとく。

十九 川土手

春來たときは
川土手に、

すみれの花が
咲いてゐた。

ゆらり ゆらゆら、春の水、
白い帆かけがうつつてた。

夏來たときは

土手の草、

ぼくのせいより

高かつた。

ちらと のぞいた大川に、

モーターボートが走つてた。

秋來たときは

すすき原、

赤いトンぼが

飛んでゐた。

と思ひながら、そこに立ち止つて、じつと見つめま
した。

つるしたランプは、靜かに左右へ動いてゐます。それ
は、つい今しがた、番人が火をつけるために、手でさ
つたからです。ガリレオがふしぎに思つたのは、そのラ
ンプの動き方でした。左から右へ、右から左へ、行つた
り來たりするのに、その一回一回の時間が、どうやら同
じであるやうに思はれてなりません。

「何かで、驗してみる方法はなからうか。」

しばらく考へてゐたガリレオは、やがて、自分の脈を
取つてみました。

やつぱりさうでした。ランプが一回動くのに、脈が二
つ打つと、次の動きにも、脈は二つ打ちます。おどろい
たことには、ランプの動きがしだいに小さくなつて、の
ちにはかすかにゆれるだけです、それでも一回動き

水は底まで澄んでゐた。

今は枯草、

川土手を、

寒い北風

吹きまくり、

ひたひたひたと、川の渡、

あし間の舟に寄つて來る。

二十 振り時計

イタリアのピサの町に、夕もやがこめて、日が靜かに
落ちて行くころでした。

ガリレオといふ學生が、この町の有名な大寺院へ、お
参りをしました。寺院の中は、もう、うす暗くなつてゐ
ました。ちやうど今、番人が、ランプに火をつけたばか
りのところでした。

でおもひをつるして、同じやうなことを、何べんとな
やつてみました。

おもひを糸でつるして、それを動かすと、おもひは左
右へ振ります。その糸を短くすれば、振り方が早く、長
くすれば、振り方がおそくなります。しかし、糸の長さ
を、一メートルなら一メートルにきめておくと、おもひ
そのものは重くても軽くても、また、大きく動かしても
小さく動かしても、振る時間は同じです。

十八歳の學生ガリレオは、このことを發見したのでし
た。それは、今から三百六十年ばかり昔のことです。

この發見があつてから、七十年餘り過ぎて、オランダ
のホイヘンスといふ人が、今までにない正確な時計を發
明しました。それは、まったくガリレオの、この發見を
應用したものです。つまり、時計の機械に、振子を仕組
んだもので、これが振り時計の始りです。

二十一 水族館

にいさんといつしよに、水族館へ行きました。入口のそばに池があつて、そこに、甲の長さが一メートルもある「うみがめ」が泳いでゐるのには、ちよつとびっくりしました。

中へはいつて、まづ目についたのは、室の窓ぎはに、いくつか並んでゐるガラスの箱でした。きれいな海の水が、こまかいあわをたてながら、どの箱にも注いでゐます。さうして、赤や、黄や、みどりの、何ともいへないほど美しいものが、その中にはいつてゐました。ぼくは思はず、

「きれいだなあ。何の花ですか、にいさん。」

といひますと、

「ほんたうにきれいだね。でも、花ぢやない。みんな海

にゐる動物だ。」

「さうだ。さうして、よくごらん。外側をまはつてゐるものも、内側をまはつてゐるものも、そろつて同時に進んでゐるだらう。つまり、外側のものは、大急ぎで進んでゐる、内側のものは、ゆつくり動いてゐる。それで、ちやうど内側も外側も、そろつて進めるのだ。」

次の室には、ガラスを張つた、大きな窓のやうなものが、順順に並んでゐて、そのガラス越しに、いろいろの魚のゐるのが見られました。「鯛」もゐました。「あぢ」もゐました。「かれひ」「たこ」、そのほか名前を始めて聞く魚が、たくさんゐました。

「鯛」は、なんといつても堂々としてゐます。五六センチもあるのが、いうふうと泳いで、ほかの魚などには、目もくれないといつたふうです。光線のぐあひで、せなかのあたりが、點々と空色に光るのが、ほんたうにきれいだと思ひました。

すきとほるやうなみどり色で、菊の花のやうに美しい形をしたのは「いそぎんちやく」でありました。

ひのきの葉のやうな形で、黄色やえび茶色をしてゐるのは「いそばな」でありました。

小さなきんせんくわが、むらがつて咲いてゐるやうなのは、「いばやぎ」でありました。

「くらげ」もゐました。すきとほつた寒天のやうなからだから、腕が何本も出てゐます。ときどき、からだをしばらくのやうにして、すいすいと浮きあがります。

「ああしてからだをしばらく、中の水が勢よく下へ出る。その反動で、くらげは運動するのだ。」

と、にいさんがいひました。

この室の中央に、直径五メートルぐらゐの、まるい池があつて、中に、たくさんの「いわし」が泳いでゐました。二千匹はゐるだらうと、にいさんがいひました。この「いわし」は、池のやうにそろつて、みんな

胸ひれをすつと左右に振り、背ひれ・しりひれをすつと下へ張つて進むかつかは、さかな屋の店先で見るのとは、まるでちがつた感じでした。

それと似て、少し變つたのが「はうぼう」です。高いところから低いところへおるとき、その胸ひれは扇のやうにひろがります。ちやうど、グライダーが空中をすべるやうに、手ぎはよく水を切つて、おりて來ます。下へおるとき、胸のところに足のやうなものがあつて、のこのこ歩くのにはおどろきました。

「かれひ」は、平たいからだをくねらせて泳ぎます。ほかの魚は、腹を下にし、背を上にして泳ぎますが、「かれひ」は、いつでもからだを横にしたまま、くねつて行きます。おもしろいのは「かれひ」が、砂の中にもぐつてゐるやうです。その平たいからだに、ちよつと砂をかぶると、上から見ても、どこにゐるのか見當がつきません。よくよく見ると、二つの目だけを砂の間から出し

て、きよろりきよろりと目だまを動かしながら、外を眺めてゐます。

「たこ」は、變つた活動をします。岩や砂の上を歩く時は、八本の長い足を上手にくねらせ、頭を横に傾けて進みます。にいさんの説明によると「たこ」といふものは妙なもので、あの頭といつてゐる部分が實は胸で、頭は足のつけ根のところにあるのださうです。

「だから、歩く時、ああいふふうに頭が傾いて、へんなかつかうに見えるが、あれは胸なのだから仕方がない。」

そのうちに「たこ」が泳ぎ始めました。八本の足を一つにそろへ、胸を先頭に、まるで矢のやうに進みます。これが「いか」だともつとすばらしいさうです。

「たかあしがに」といふ、大きなかにがゐました。左右の足をいつばいに延したら、三メートルぐらゐはあるでせう。足の長い割合に、今は小さいのですが、おもひ

ねえさんは、すぐに御飯をたき始めた。私は、飯臺を出てふいたり、みんなのお茶わんや、おほしや、おわんを並べたりした。それから一郎さんを起しに行くと、

「ねむいな。」
と大きな聲を出した。

「一郎さん、ゆうべのお約束よ。さ、静かに起きませうね。」

「ああ、さうだつた。」

といひながら、目をこすつて起きた。水で、じやぶじやぶ顔を洗つてから、

「ぼくは、庭はきをするのでしたね。」

と、一郎さんは、はうきを持つて、外へ出て行つた。

「すわぶん寒いな。」

そんなことをいつて、庭をはき始めた。

入つた道具がついてゐますが、その上のところ、小さな觸角とくかくがあつて、それが、ちやうど人形のかはいらしい兩手を思はせます。しかも、その手は、ビヤノでもひくやうに、絶えず動いてゐます。

「かには、ビヤノの先生ですね。」

と、ぼくがいふと、にいさんは、

「それよりも、タイピストさ。」

と、いつたので、二人とも思はずふきだしてしまひました。

二十一 母の日

朝、目がさめたのは、五時過ぎであつた。ねえさんも起きるところであつた。ねえさんが、

「そうつと、静かにお仕事をさせうね。一郎さんは、もう少したつてから起させう。」

いつたので、私は、音のしないやうに起きて、音切をかがった。

「もうちき六時ね。今日はお祝ひの日ですから、何か花をかざりたいものですね。」

とねえさんがいつた。庭へ出て見ると、つばきが一人咲きさうになつてゐた。それを折つて來ると、ねえさんが、

「きれいなつばきね。おかあさんのおすきな花だから、ちやうどいいでせう。」

といつて、一人ざしにさして、飯臺の上にかざつた。

そこへ、おかあさんが起きていらつしやつて、みんなのゐるのをごらんになつて、びつくりなさつた。

「まあ、けさはどうしたのです、こんなに早く起きて——それに、朝御飯の支度もちやんとできて。」

一郎さんが、

「今日は母の日ですから、おかあさんのお手傳ひをしたのです。」

といったので、おかあさんも、やつとおわかりになつた。

御飯の時、おかあさんが、おとうさんに、

「けさは、子どもたちが早く起きて、朝御飯の支度からお庭のさうなまで、私の知らないうちに、すっかりしてくれましたよ。」

とおつしやると、

「それは、えらい。感心なことだ。」

とおほめになつた。

その夜、みんなが集つてゐる時、一郎さんが、お座敷の真中に立つて、

「ただ今から、母の日のお祝ひをいたします。初めに、ぼくが綴り方を讀みます。」

といつて、綴り方を讀んだ。題は「ぼくのおかあさん」といふのであつた。

私は國語の「水族館」を讀んだ。それからねえさん

等科國語(三)第四學年前期用(第三分冊)【第二分冊第二十二「母の日」ニツタク】

「おしまひに、おかあさんに記念品をさしあげます。」

といったので、おかあさんは、

「何をいただくのでせう。」

とにこになつた。

「一郎さんが、一枚の繪をさしあげた。」

「おやおや、おかあさんをかいてくれましたね。これはありがたい。一郎さん。」

次に、私が、自分でこしらへた前掛をあげた。おかあさんは、それをちよつとお當てになつて、

「よく似あひますね。かはいいぬひとりだこと。」

どおつしやつた。最後にねえさんは、ひもであんだきれいな買物袋をさしあげた。

「これは、いいものをもらひました。毎日の買物に持つて行きませう。」

と、うれしそうにおつしやつて、おとうさんにお見せに

なつた。

おとうさんは、

「これはこれ。今日はいいい日だったね。」

と、おかあさんにおつしやつた。

二十三 みにくいあひるの子

むなかは、いいお天気であつた。麥畑は黄色く、からす麥はみどりであつた。野原には、かれ草が積みあがられ、この鳥は、長い、赤い足をして、歩きまはつてゐた。島や野原のまはりには、大きな森があり、森の中には、深いみづうみがあつた。

みづうみの、こぼうの生えてゐる高いところに、一羽のあひるがすわつてゐた。それは、卵をかへしてゐるのであつた。けれども、親あひるはひなが出て来る前に、

昭和二十一年四月九日 印刷印刷
昭和二十一年四月三十日 印刷發行
昭和二十一年四月九日 印刷發行

初等科國語(三)第四學年前期用(第三分冊)

◎ 定價 金 參拾五錢

著作權所有 發行所 文 部 省

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

印刷發行 東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

印刷所 東京書籍株式會社

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

發行所 東京書籍株式會社

Approved by Ministry
of Education
(Date Apr. 9, 1946.)